祐天寺のなりたち

大正大学教授　玉山成元

江戸に幕府が開かれてから百年、世の中はすっかり落ちつき、町人たちの生活も豊かになって、きらびやかな風俗が目につくようになった。念仏の教えも深く人々の心をみたし、生活の一部になっていった。その中心となって尊敬されていたのが祐天上人である。その名声はあまりに高く、将軍や大奥の人々をはじめ、武士や町民まで、多くの人々から生き仏として親しまれた。

高齢のため、増上寺住職を退かれた祐天上人は、麻布竜土の禅室で静養されていたが、享保三年（一七一八）の春ごろから健康がすぐれなかった。それでも毎日の勤行やお名号を書くことは休まなかった。看護につとめていた祐海上人をはじめ、周囲の人々は無理をしないようにと願ったが、祐天上人はききいれなかった。上人の元気なうち、ぜひ会いたいと考えられた八代将軍吉宗は、この年四月三十日増上寺で会い、お十念を授かり、ご法話を聞いて満足された。

祐天上人の往生が近いことを感じた祐海上人は、早く廟所を決め、そこで、常念仏を続けたいと考え、上人を許しをえた。ところが当時は新しく寺を建てることは禁止されていた。とくに吉宗の時代は一番きびしいときであった。思うようにいかず困っていた矢先、七月十五日、八十二歳の祐天上人は遷化されてしまった。中陰の法要は麻布竜土の禅室ですませたが、まだ廟所は決まっていなかった。祐海上人は寺社奉行の土井利忠をはじめ、大奥老女の常盤井など、八方に手をつくして廟所の申請を続けた。そのかいあって、十月十四日下目黒善久院の話がまとまった。

寛永三年（一六二六）覚随上人は、目黒の北川久左衛門の帰依をえて、彼の土地四百坪の寄進をうけて一宇を建立、久左衛門の菩提を弔うため法名をとって善久院といった。善久院の本寺は増上寺山内の月界院であった。もともと祐天上人は、目黒あたりに廟所をつくりたいと考えておられ、ある程度の資金もたくわえていたが、目黒はお鷹場であり、寺の移転も無理であった。幸い小さな寺ではあったが善久院との間に話がついた。つまり祐海上人は百両でこの寺を買って住職となり、覚随上人は隠居することになった。寺はいたみがひどかったために取りこわし、新たに廟所と常念仏堂（本堂）を建て、さらに麻布竜土の家作を引き移して、一応の形はととのった。しかし実際には新寺の建立とかわりなく、当時としては大破格であった。

正徳二年（一七一二）十月十四日、六代将軍家宣遷化のとき、導師をつとめたのは祐天上人である。また上人は五代将軍綱吉の母桂昌院の善知識（注）にもなり、大奥の人々も、生きた仏様として敬っていた。こうした上人の徳が、将軍をはじめ、多くの人々の善意によってむくいられ、廟所をつくることができたのであろう。祐天上人がなくなられたとき、家宣の側室月光院は、めでたく廟所ができたときは、水引にして下さいと赤地の金襴一巻と紫飛金の紗の袈裟地二巻を寄進している。このときすでに月光院の頭

祐天寺のなりたち

大正大学教授　玉山成元

の中には、祐天上人の廟所の青写真ができていたと考えられる。善久院の口添も、月光院の力が大きかったことはいうまでもない。しかし祐海上人をはじめ、多くの弟子たちは、何としても廟所を作り、祐天上人の報恩のため、常念仏を実行しようと活発な運動を展開した。師僧を思うこの誠実さが多くの人々に感銘を与えたことを忘れてはならない。こうして享保三年（一七一八）閏十一月五日、将軍吉宗の許可がおりた。工事は順調にすすみ、翌享保四年（一八一九）二月十七日、入仏供養が行われた。

お練りの行列は麻布竜土から出発した。前後左右を武士に護られた行列は、祐天上人の真影を先頭に、御舎利、御舌根、新住職祐海上人と続いた。花の好季節、晴天に恵まれたこの行列を、一目拝んで結縁しようとする善男善女は沿道にあふれ、交通整理をするのが大変であったという。まれにみる花やかな行列は、江戸町民の目を楽しませるのに十分であった。

こうして一応諸堂はととのったが、肝心の寺号がなかった。そこで祐海上人は享保四年二月四日に祐天寺の寺号を申請した。ところが新寺法度のため、当分の間は善久院祐天寺と続けて呼ぶようにと申しわたされた。祐天寺と正式にみとめられたのは、享保八年（一七二三）正月十三日からである。祐海上人は、明顕山祐天寺とならなければ、往生することができないと書いて新しい像を胎内に納めたほどである。しかし月光院の力添えにより、晴れて明顕山善久院祐天寺と公称されるようになった。こうして祐天寺は、名僧の廟所にふさわしく充実され、発展するようになった。

（注）念仏の教えに導く善き人